

第202回（令和3年5月30日施行）

2級商業簿記

第1問

本問は、基本的な取引における仕訳の理解を問うものである。

1. 約束手形を裏書譲渡したときは、受取手形を減額する。
2. 前期以前に貸倒れとして処理していた債権を回収したときは、償却債権取立益として収益計上する。
3. オペレーティング・リース取引でリース料を支払ったときは、賃貸借取引として支払リース料勘定で処理する。
4. 固定資産の改良を行ったときは、その固定資産の取得原価に加算する。また、修繕引当金が設定されている固定資産の修繕を行ったときは、前期末の決算において費用計上済みの修繕引当金残高を除いた額を、当期の費用として修繕費勘定で処理する。
5. 税抜方式において期末に消費税額を確定するときは、仮払消費税と仮受消費税を相殺し、仮払消費税の方が大きければ差額を未収還付消費税とする。
6. 配当金を支払ったときは、株主総会の決議により計上してある未払配当金を減額する。
7. 決算時において、外貨預金は、決算時の為替相場で円換算する。換算によって生じた為替差額は、為替差益勘定または為替差損勘定で処理する。本問の場合は為替差損となる。

第2問

本問は、会計学でいう貸借対照表等式および損益計算書の利益計算式が、簿記ではどのように現れるか、とくに当期純利益（当期純損失）の計算構造、ならびに、管理上必要な売上総利益をどのように算出するかを問うものである。

本問を通じて、仕入勘定で売上原価が計算されること、収益費用に関する勘定は損益勘定に振り替えられること、株式会社の会計では損益勘定残高は繰越利益剰余金勘定に振り替えることなど簿記記録の基本的な仕組みを確認して欲しい。

解答にあたっては、売上総利益は、売上勘定残高から仕入勘定残高を控除することで計算できる。また、仕入勘定と売上勘定の残高を損益勘定へ振り替えたうえで、損益勘定残高より当期純利益（当期純損失）を計算する。この損益勘定残高は、繰越利益剰余金勘定に振り替えられる。なお、資本金（前期繰越）は、資本金（次期繰越）に増資の金額を減算して計算する。

第3問

本問は、仕入帳と売上帳の内容から取引を読み取り、払出単価の計算（移動平均法）、総勘定元帳、仕入先（買掛金）元帳と得意先（売掛金）元帳への転記ができるかを問うもので

ある。

移動平均法は、単価の異なるものを受け入れたつど平均単価を求め、これを払出単価とする方法である。平均単価は、受入価額と受入直前の残高価額の合計を、受入数量と残高数量の合計で除して求める。

また、仕入帳と売上帳が補助簿であるため、取引はすべて日付順で仕訳帳に仕訳され、総勘定元帳の諸勘定、仕入先（買掛金）元帳と得意先（売掛金）元帳の人名諸勘定に個別転記される。

第4問

本問は、3伝票制における伝票の記入方法、仕訳集計表の作成を問うものである。入金伝票には借方が現金となる取引が、相手勘定科目のみを記入し起票される。また、出金伝票には貸方が現金となる取引が、相手勘定科目のみを記入し起票される。売上・仕入取引については、売上・仕入を伝票上、総額で把握するため、すべていったん掛けとして処理した後に、掛代金を決済したとみなして他の伝票に起票する方法を採用している。

第5問

本問は、付記事項と決算整理事項に基づいて記録の修正を行った上で、損益計算書と貸借対照表を精算表上で作成する方法を問うものである。

- ① 付記事項と決算整理事項を、期中に記録がある勘定は金額のみ、記録がない勘定は勘定科目を記入した上で整理記入欄に貸借記入する。
- ② 収益・費用の勘定に、整理記入欄の修正額を加減し、損益計算書欄に書き移す。
- ③ 資産・負債・純資産（資本）の勘定に、整理記入欄の修正額を加減し、貸借対照表欄に書き移す。
- ④ 損益計算書欄の合計額を計算し、貸方の収益合計が大きい場合は当期純利益が生じているから貸借差額を借方に記入し、合計額で計算結果を照合する。当期純利益は純資産（資本）の増加であるから貸借対照表欄の貸方に書き移し、貸借対照表欄の合計額の一致によって当期純利益を検証する。